

3/0 まいど！倫理が、山陰地帯の車一休みで、潮せぬ降、後の山の様子も要注意です。万象我師 - 取巻子の全二が井師、喜んば食物と読書の

今週の

倫理

7月のテーマ |

万象我師

2021. 7. 10 ~ 7. 16

1237号

と来ない我師であらう。喜物に解小の事から学びのスト!

幸せ運ぶ、アホ鳥

「自然から学ぶ」ということは、一般的によく言われることです。鎌倉初期の歌人、鴨長明の「ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず」の一文も、川の様子から世の諸行無常のありさまを観取したものです。大自然から何を学び取ることができるのかを教えてくださいるのが先人であり、その様子を著したのが書物です。例えば日常、「一体感を持つ」や「一体になる」という表現を私達は何気なく使っています。しかしながら、「一体」という言葉について、実感を伴って理解できている人は、一握りなのかもしれません。

稀代の数学者である岡潔と批評家の小林秀雄の対談を収めた『人間の建設』という書物があります。その中で小林のある問いに対して「私がいま立ち上がりますね。そうすると全身四百幾らの筋肉がとっさに统一的に働くのです。そういうのが一というものです。一つのまとまった全体というように意味になります」と岡は応えています。

まだ立つこともおぼつかない人間の赤ちやんを見ていると、手足の動きも、タイミングも、バランスもバラバラです。しかし、何度も転びながら訓練を積み重ねる中で「立つ」という行動をよどみなく行なうことができるようになっていきます。「立つ」という一つの動作を行なうために、何百という筋肉が連携して働いています。体全体が統一的に働いている様子が「一」と表現されています。岡の言葉は身近な例で「一体」という状態を伝えているのです。



## 書物に触れながら 先人の叡智を学ぶ

また現代の書物は、個人では不可能な大規模な調査によって見いだされる社会現象の実態も教えてくれます。

『予測不能の時代』の著者、株式会社日立製作所フェローの矢野和男氏は、幸せの調査と行動計測を同時に行ない、「幸せな組織では、会話中に身体が互いによく動く」と指摘し、次のような見解を述べています。

「人を幸せにし、自分も幸せになるには、この会話中の身体の動きに注目し、自ら同調させて動かすことで、共感と信頼を発展させることがとても大事なのである」

これは、アクティブ・リスニングにより共感と好奇心を示すことで、相手との関係性が深められることをデータで示しただけでなく、それが幸せと直接的につながっていることを説いているのです。

『万人幸福の栞』第四条の後半部分には次のように記されています。

「太上は天を師とし、其次は人を師とし、其次は経を師とす」(『言志録』)

学びの順番が示されたものですが、誰もがすぐに大自然から学べるわけではないでしょう。直接人から学ぶだけでなく、書物も師として学ぶ対象だと論じているのです。先人が大自然から学んだこと、研究者が調査や実験によって明らかにした研究成果が、書物には記されています。他にも様々な分野で、書物は私たちの「師」として、語りかけてくれているのです。

書物を読むことを喜び、価値観を磨きながら、先人の叡智を学び深めたいものです。